

有田・小田部 61

- 有田遺跡群第 272 次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1494 集

2024

福岡市教育委員会

有田・小田部 61

－有田遺跡群第 272 次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1494 集



道跡略号 ART-272
調査番号 2135

2024

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘に面し、古来より大陸・半島との交流が絶え間なく行われてきました。なかでも早良区南庄周辺には、弥生時代から近世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建設工事に伴う有田遺跡群第272次発掘調査について報告するものです。この調査では竪穴建物跡、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴等を検出し、弥生時代から平安時代に至るまでの土器、石器等が出土しました。これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係者の方々には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和6年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区南庄3丁目257、258、260-4の共同建設工事に先立ち、令和3（2021）年度に実施した有田遺跡群第272次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3. 本書の執筆と編集は田中健が担当した。
4. 本書の遺構実測図の作成は野村俊之、田中が、遺物実測図の作成は吉富千春、製図は田中が担当した。担本は林由紀子が担当した。
5. 本書の遺構・写真は田中が撮影した。
6. 本書で用いた方位は、すべて座標北を示す。
8. 検出遺構は、001から検出順に通し番号を付けた。竪穴建物跡、掘立柱建物跡については「SC-001」や「SB001」と番号を付けている。
9. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SC竪穴建物 SB掘立柱建物 SP柱穴
10. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理・公開する予定である。大いに活用していただきたい。

遺跡名	有田遺跡群	調査回数	272次	調査略号	ART - 272
調査番号	2135	分布地図図幅名	81 室見	遺跡登録番号	0309
申請地面積	718.65㎡	調査対象面積	200.21㎡	調査面積	196.107㎡
調査期間	令和3年11月22日～令和4年1月28日			事前審査番号	2021-2-137
調査地	福岡市早良区南庄3丁目257、258、260-4				

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 遺跡の立地と環境	3
II. 調査の記録	
1. 調査の概要	6
2. 遺構と遺物	
竪穴建物跡 (SC)	8
掘立柱建物跡 (SB)・櫛列 (SA)	8
その他の遺物	11
III. まとめ	12

挿図目次

第1図 有田遺跡群と周辺遺跡 (1/25000)	2
第2図 有田遺跡群 (1/10000)	4
第3図 調査区位置図 (1/1000)	5
第4図 調査範囲 (1/500)	6
第5図 調査区全体図 (1/100)	7
第6図 竪穴建物跡 (1/60)・カマド土層図・遺物出土状況図 (1/20)	9
第7図 竪穴建物跡出土遺物 (1/3・1/4)	10
第8図 掘立柱建物跡・櫛列 (1/60)	11
第9図 その他の遺物 (1/3・1/1)	11

図版目次

1. 調査区全景 (東から)	13
2. 調査区全景 (南から)	13
3. SC001 (北から)	14
4. SC001 遺物出土状況① (東から)	14
5. SC001 遺物出土状況② (東から)	14
6. SC001 焼土・白色粘土検出状況 (西から)	15
7. SC001 カマド出土遺物 (東から)	15
8. P009遺物出土状況 (北東から)	15

第I章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

福岡市教育委員会（経済観光文化局埋蔵文化財課）は、早良区南庄3丁目257、258、260-4番地における共同住宅建設における埋蔵文化財有無についての照会（2021-2-137）を受理した。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群内にあり、周辺の確認調査で遺構を確認しているため、申請地内でも遺構の存在が推測された。これを受け、埋蔵文化財課事前審査係が令和3年8月10日に確認調査を実施し、現地表面下0.8mで古墳時代の柱穴を確認した。このため、遺構の保全等に関して申請者と協議したが、予定建築物の構造上、埋蔵文化財への影響が回避できないため、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

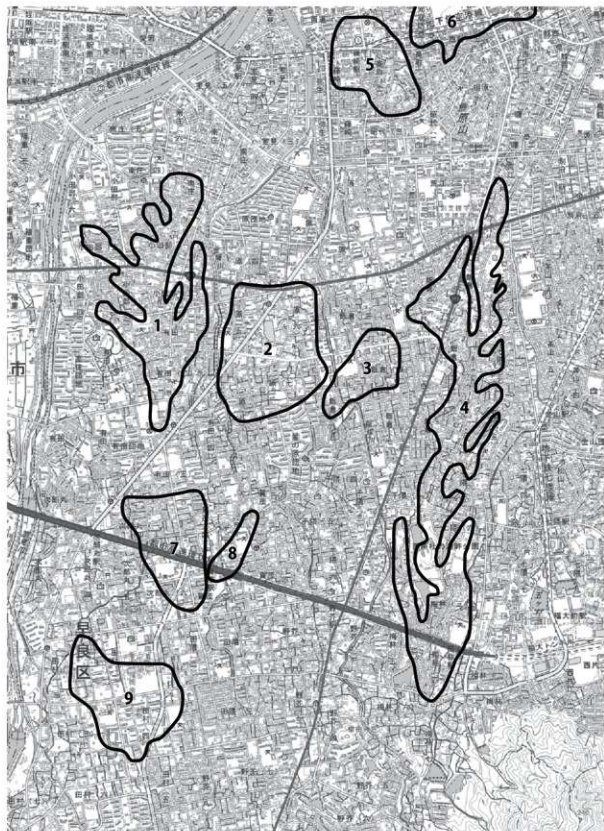
その後、令和3年11月18日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、令和3年11月22日から令和4年1月28日まで発掘調査、令和4、5年度に資料整理および報告書作成を実施した。

申請地718.65mのうち調査対象は、工事で埋蔵文化財に影響が及ぶ200.21mで、それ以外の範囲は現状保存している。

調査にあたっては、事業者様および近隣の方々からご理解をいただくとともに多大なご協力を賜りました。また、発掘調査・報告書執筆に際して以下の方々にご教導を賜りました。記して深謝いたします。

2. 調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会		
調査委託	個人		
〈発掘調査 令和3年度〉			
調査総括	福岡市経済観光文化局文化財活用部		
	埋蔵文化財課 課長	菅波	正人
	埋蔵文化財課 調査第1係長	本田	浩二郎
調査庶務	文化財活用課 管理調整係長	石川	あゆ子
	文化財活用課 管理調整係	内藤	愛
事前審査	埋蔵文化財課 事前審査係長	田上	勇一郎
	埋蔵文化財課 事前審査係	三浦	悠葵
調査担当	埋蔵文化財課 調査第1係	田中	健
〈整理・報告 令和4、5年度〉			
整理・報告総括	埋蔵文化財課 課長	菅波	正人
	埋蔵文化財課 係長	井上	蘭子
整理・報告庶務	文化財活用課 管理調整係長	石川	あゆ子
	文化財活用課 管理調整係	内藤	愛
整理・報告担当	埋蔵文化財課 調査第2係	田中	健



1. 有田遺跡群 2. 原遺跡 3. 原東遺跡 4. 飯倉遺跡群 5. 藤崎遺跡
 6. 西新町遺跡 7. 次郎丸高石遺跡 8. 免遺跡 9. 田村遺跡

第1図 有田遺跡群と周辺遺跡 (1/25000)

3. 遺跡の立地と環境

支界灘に北面し、背後に背振・三郡山系をひかえる福岡市には、これらより派生する山塊、丘陵によって画される中小の平野が展開しており、東側から粕屋、福岡、早良、今宿平野と呼称される。今回報告する有田遺跡群はこのうちの早良平野に位置する。

早良平野は現在の行政区分では早良区、西区に位置している。西は背振山系から北側に派生している飯盛山・長垂山が伸びて今宿平野と区画される。東は油山から低丘陵が連なり、福岡平野との境を示している。また、平野中央部を博多湾へと北流する中小河川による沖積平野でもあるが、中小河川の下流域では第三紀丘陵や洪積台地が点在している。平野中央部西側の室見川と金屑川に挟まれた地域はAso-4火砕流体積による下層の八女粘土・上層の鳥橋ローム層からなる中段段丘上に展開する。この段丘は、南北約1.7km、東西約0.7kmにわたり、有田遺跡群の最高所では標高15mを測る。また、室見川・金屑川による浸食を受け、大小の谷が形成されているため、八手状に広がる形状をしている。

有田遺跡群の本格的な調査は、区画整理事業に伴う1967年の九州大学考古学研究室による第1次調査を始まりとし、1975年以降は福岡市教育委員会による緊急調査を主体にこれまで270次の調査が行われている。

旧石器時代は中世後半期の造成により包含層の依存状況は良好ではないが、ナイフ形石器・ポイント等の遺物が確認でき、第6・131次調査では包含層を確認している。

縄文時代では台地の南西部で第5次・116次調査が行われ、中期から後期の立柱痕跡が確認できる貯蔵穴群が検出されている。また、南西側に位置する有田七反田前遺跡からは帯文土器などが出土しており、終末期の様相を伺い知ることができる。

弥生時代では、前期から中期にかけて台地の様相は活発な活動状況をみせ、遺構や遺物が台地全体において検出されるようになるが、後期では活動状況は縮小する。前期初頭の台地南部では、第2・45次・54次・77次調査を中心に高所を取り囲むように楕円形状の断面「V」字状の環濠がみられる。その規模は長径約300m、短径約200mである。その後別地点にも環濠が確認でき、各所に集落が展開するが、後期前半以降は断絶する。また、甕棺を主体とする墓地は数ヶ所みられるが、長期に及ぶ墓域は限定される。現在の所2つの墓域において銅矛や前漢鏡等の副葬品、铸造鋳型などが確認されており、有力者の存在が伺える。

古墳時代では、弥生時代終末期から続いて集落が形成され、中期段階では韓半島系の軟質土器や陶質土器が多く出土し、韓半島との交易・交流を窺い知ることができる。

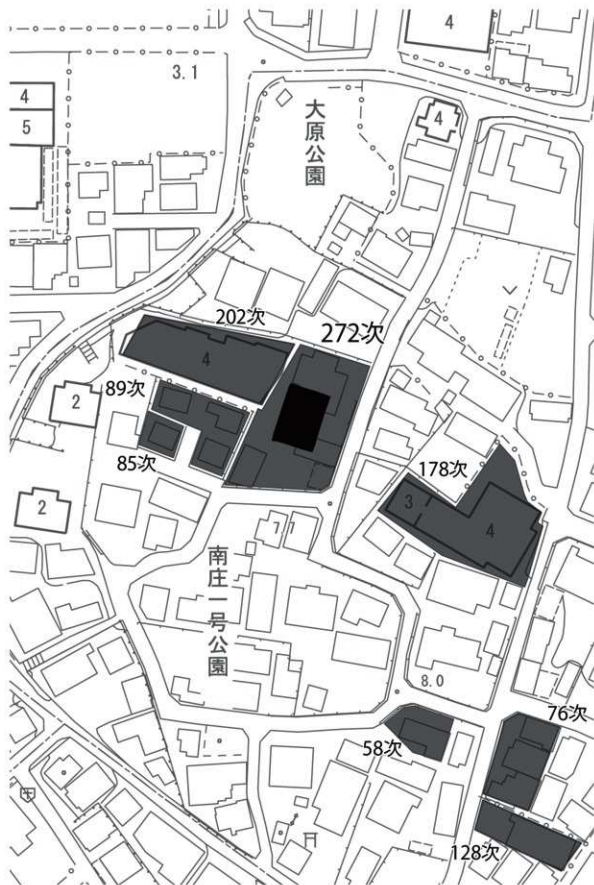
古墳時代後期から古代にかけては、柵や溝に区画された大型の倉庫群が各所にあり、郡津官家や早良郡衙に関わる施設と指摘されている。また、早良平野は律令期には早良郡にあたり、「和名抄」によると、比伊・能解・額田・早良・平群・田部・曾我の7郷があり、有田遺跡群はそのうちの田部郷に含まれるものと考えられている。

中世では戦国期の遺構が顕著に確認でき、濠で方形に区画された遺構群が数か所で確認されている。これらは大内氏の支配下で設けられた郡代や在地の有力者の城館であった可能性が考えられる。また、江戸時代に書かれた『筑前国純風土記拾遺』には戦国期の大友氏の家臣、小田部氏の里城が有田村にあったと書かれている。本書にも掲載しているが、第267次で掘が確認されており、小田部城に関わると考えられている。

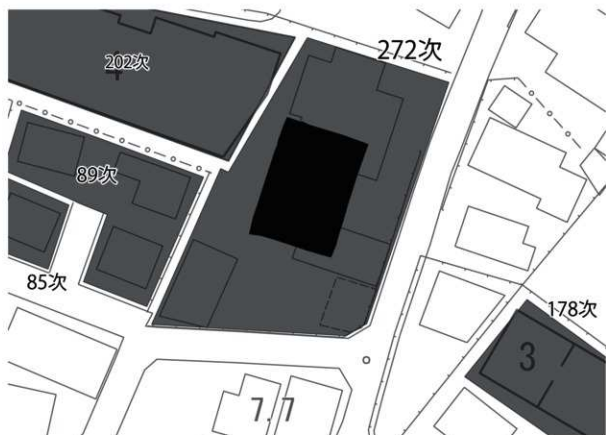
また、近世では屋敷の区画溝が268次周辺から検出されており、今宿で制作された瓦や、高取焼などの遺物が確認されている。



第2図 有田遺跡群調査一覽 (1/7500)



第3図 有田遺跡群第272次調査位置図 (1/1000)



第4図 有田遺跡群第272次調査範囲 (1/500)

第Ⅱ章 調査の記録

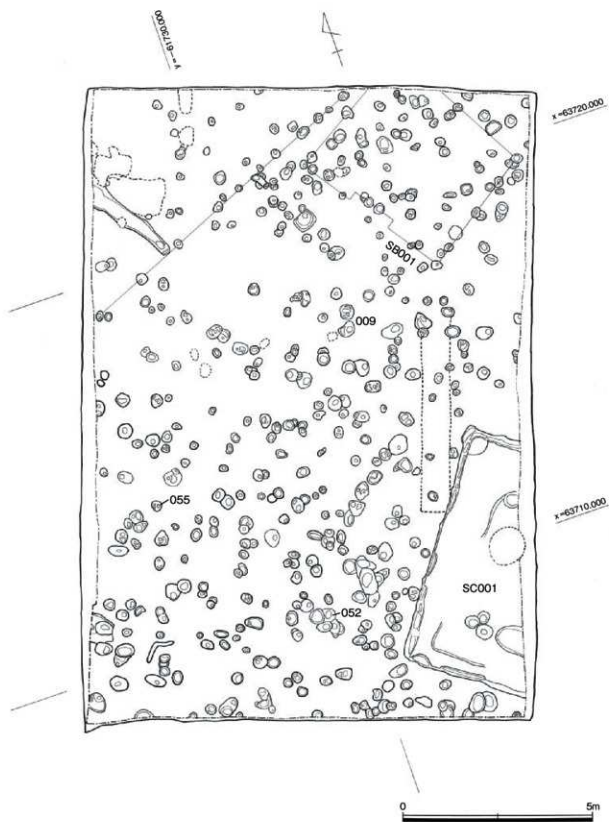
1. 調査の経過と概要

第272次調査地点は有田遺跡群の北側にある。周辺で行われた89次調査では、周溝墓の周溝、古墳時代の竪穴建物跡を検出している。178次調査では、弥生時代の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土坑、古墳時代中期の円墳1基（主体部は木棺墓か）、円形周溝墓6基（主体部は竪穴式石室1、木棺墓1、石棺墓2、石蓋土壇墓1、土壇墓2）、木棺墓1基、石棺墓1基、木蓋石棺墓2基（うち1基は円墳の周溝内埋葬）、土壇墓2基（うち1基は円墳の周溝内埋葬）、壺棺墓1基（円墳の周溝内埋葬）、古墳時代後期の竪穴建物跡、粘土貯蔵穴、溝状遺構で検出されている。202次調査では、方形周溝墓1基、円形周溝墓2基、土坑、ピットを検出している。方形周溝墓の主体部からは小型仿製鏡が1面出土している。

調査は令和3年11月22日に開始した。調査前の現地表面は調査区南西端で標高約7.55m、調査区北西端で標高約6.95mを測り、鳥柄ローム上面（G.L.-105cm）で遺構検出を行った。遺構面の標高は調査区北東端で標高6.22m、調査区北西端で標高6.43m、調査区南西端で6.48m、調査区南東端で標高6.65mを測る。調査区南東端から緩やかに傾斜している。

検出した遺構は、弥生時代から～古墳時代にかけての竪穴建物跡・溝・土坑・柱穴などである。

遺物は弥生土器、石器、土師器、須恵器、陶磁器等で、コンテナケース3箱分である。



第5図 調査区全体図 (1/100)

竪穴式建物跡

SC001 (第6図)

調査区の南東隅で検出した竪穴式建物跡である。東側は調査区外に延び、現状で南北6m、東西3.5m以上の方形を呈し、深さは約20cmを測る。床面は平坦であるが、壁に近づくると丸みを持って若干上昇し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面に一部段差がみられるため、ベッド状遺構があった可能性がある。埋土は暗褐色粘質土を主体とする。建物内の外周を一部途切れてはいるが、幅約10cm、深さ4～10cm程の壁溝が掘られている。壁溝の埋土は暗褐色粘質土である。貼り床は見られない。北西壁中央付近に焼土とカマドの構築土として利用されたと考えられる白色粘土を検出した。そのため、カマドは本来北西壁中央にあったと考えられる。燃焼部にあたる付近から土師器の甕が出土した。主柱穴と考えられる柱穴を2つ検出した。深さは40～50cmで、埋土は暗褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (第7図)

1は土師器の高坏である。復元口径は16.7cm、復元脚部径は16.2cmである。坏部の外面は摩滅が著しいがヨコナデを施す。脚部については外内面ともに摩滅が著しく調整については不明である。色調は坏部は内外面ともに橙色、赤橙色、脚部は内外面ともに黄橙色を呈す。焼成はやや不良である。2は土師器の甕である。復元口径は14cm、残存高は8.2cmである。外面は摩滅が著しいがヨコナデと押圧ナデを施す。内面は摩滅が著しいが、一部ヨコナデの痕跡がみられる。色調は外面は赤橙、暗赤灰色、外面は黄橙色、一部黒色化しており黒褐色を呈す。3は土師器の高坏の坏部である。復元口径は14cm、残存高は6cmである。外内面ともにヨコナデを施す。

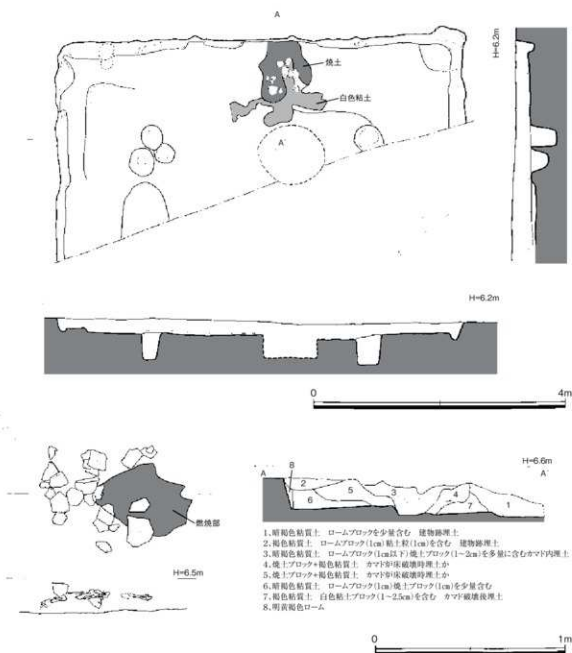
4～6は須恵器の坏蓋である。4は復元口径14.4cm、器高は3.6cmである。外面は回転ヘラ削りと回転ナデを施す。内面は回転ナデを施す。色調は外面が褐灰色、黒褐色、内面が白灰色、灰色を呈す。焼成は良好である。5は口径14.3cm、器高は4cmである。外面は回転ナデと回転ヘラ削りを施す。内面は回転ナデ、一部回転ナデ後に一定方向のナデを施す。色調は外面が灰色、内面が暗赤灰色を呈す。焼成は良好である。6は口径14.8cm、器高は4.5cmである。外面は回転ヘラ削りと回転ナデを施す。内面回転ナデ、工具によるタタキを施す。色調は外、内面ともに灰色を呈す。焼成は良好である。

7～10は須恵器の坏身である。7は口径11.9cm、器高は4.7cmである。外面は回転ナデと回転ヘラ削りを施す。内面は回転ナデ、一部回転ナデ後に一定方向のナデを施す。色調は外面は灰白色、灰色、内面は明オリブ色を呈す。焼成は良好である。8は口径13.2cm、器高は4.1cmである。外面はと回転ナデと回転ヘラ削りを施す。内面は回転ナデ、一部回転ナデ後に一定方向のナデを施す。色調は内、外面ともに灰色を呈す。焼成は良好である。9は復元口径15.6cm、残存高は4.1cmである。外面は回転ナデ、回転ヘラ削りを施す。内面は回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰黄色を呈す。焼成は良好である。10は復元口径13.6cm、残存高3.6cmである。外内面ともに回転ナデを施す。色調は内外面ともに灰色を呈す。焼成は良好である。

11は砥石である。縦12.3cm、横6.1～7.5cm、厚さ5.7cmである。石材は砂岩である。4面を砥面として利用している。以下のことから、時期は古墳時代後期と想定する。

掘立柱建物跡 (SB)・柵列 (AS)

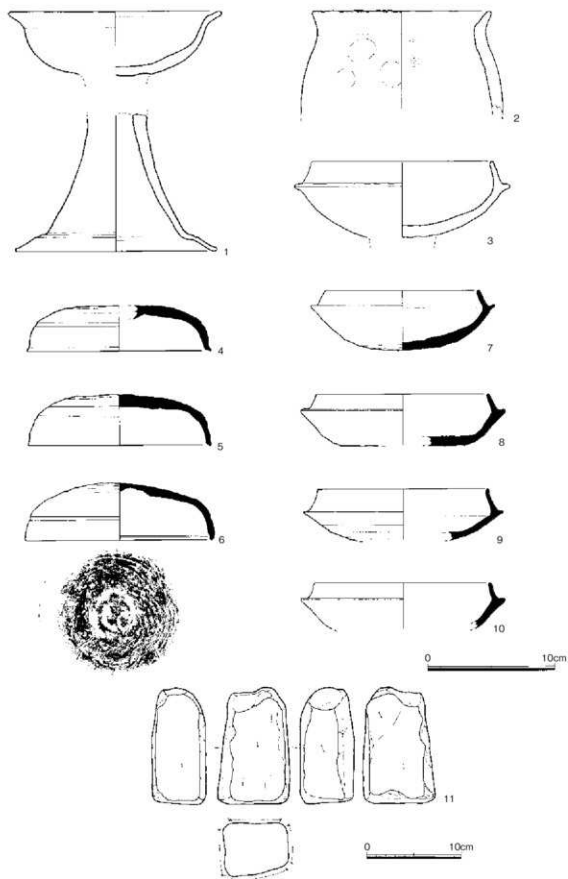
掘立柱建物1棟と柵列1列を確認した。ほかにも多くのピットを検出したが、建物に復元できるものではなく、多くは木根である。



第6図 SC001 (1/60)・カマド遺物出土状況、カマド土層図 (1/20)

SB001 (第8図) 調査区北端で検出した掘立柱建物跡である。一部調査区外に延びるため、2間×2間の掘立柱建物跡である。梁行の柱間隔は1.7m、桁行は2mを測る。出土遺物は小片であるため時期は不明である。

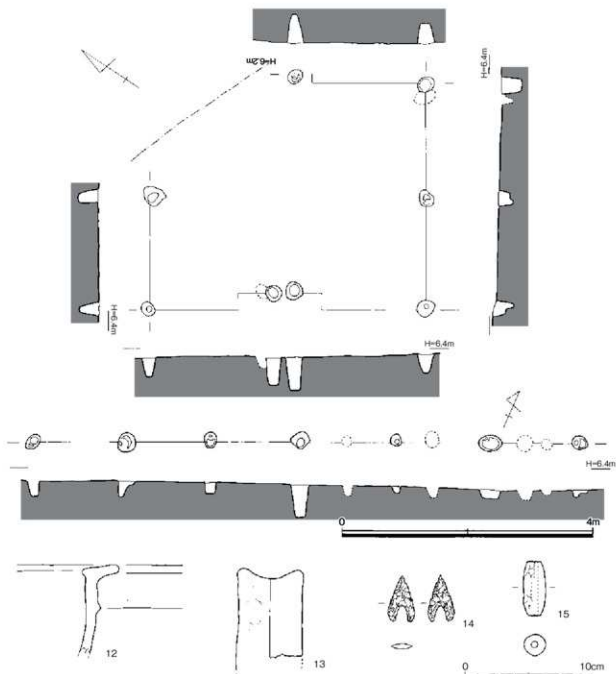
SA001 (第8図) 調査区北東で検出した。6間分を検出し、長さ8.8mを測る。柱間は1.4～1.5mを測る。各柱穴掘方は、直径20～30cmの円形を呈する。柱穴の深さは12～50cmを測る。柱痕が残るものは確認されなかった。出土遺物は小片であるため時期は不明である。



第7図 SC001 出土遺物 (1～10は1/3・11は1/4)

その他の出土遺物

12はP009で出土した弥生土器の甕口縁部片である。鋤形口縁である。外面内面ともに磨滅が激しいが回転ナデである。13はP052で出土した不明土製品である。表面は磨滅が著しいが、指頭痕が残る中実である。色調は赤橙色で胆土中に白色砂粒を含む。14はP055で出土した黒曜石製の石鏃である。縦2.5cm、横1.4cm、厚さ0.25cmである。15は表土中で出土した土錘である。縦4.3cm、横1.7cm、厚さ0.6cmである。



第8図 SB001・SA001 (1/60)・第9図 その他の出土遺物 (12～13・15は1/3・14は1/1)

第三章 まとめ

有田遺跡群第272次調査では、古墳時代後期の竪穴建物跡1軒と時期不詳の掘立柱建物跡1軒、柵列1列を検出した。そのほかにも、多くのピットを検出したが、出土している土器の多くは小片であり、表面が摩滅しているため時期を特定できた遺構は少ない。

周辺で行われた89次、178次、202次調査で確認されている古墳時代前期の古墳や周溝墓群に関連する遺構は確認することができなかった。周辺の調査の遺構面の標高との比較を行ったが、本調査地が古墳時代当時、谷のような低くなった土地ではなく、台地の中央部である東側に向かって緩やかに傾斜している斜面上にあったことが分かった。

今回の調査において、当該地において古墳時代後期の居住域が形成されていたことを確認することができた。周辺での調査で確認されている古墳時代前期の古墳・周溝墓群については今後も周辺の調査内容を注視する必要がある。



1. 調査区全景（東から）



2. 調査区全景（南から）

図版 2



3. SC001 (北から)



4. SC001 遺物出土状況①
(東から)



5. SC001 遺物出土状況②
(東から)



6. SC001 焼土・白色粘土
検出状況 (西から)



7. SC001 カマド出土遺物
(東から)



8. P009遺物出土状況
(北東から)

報告書抄録

ふりがな	ありた・こたべ 61							
書名	有田・小田部 61							
副書名	有田遺跡群第 272 次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 1494 集							
編著者名	田中 健							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒 810-8621 福岡市中央区天神 1 - 8 - 1							
発行年月日	2024 年 3 月 22 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ありたいせきひん 有田遺跡群 第 272 次	ふくおかひんくわん 福岡県福岡市 早良区南庄3丁目 257, 258, 260-4	40137	0309	33° 34' 21"	130° 20' 06"	20211122 ～ 20220128	196.107	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
有田遺跡群	集落	弥生時代・古墳時代	竪穴建物・土坑・溝・ 柱穴		弥生土器・土師器・ 須恵器・石器			
要約	<p>有田遺跡群は早良平野の北側に位置し、室見川右岸の独立中位段丘上に立地する。第 272 次調査地点は遺跡群内の北側に位置し、遺構面の標高は約 6.5m を測る。近隣地では 89 次、178 次、202 次調査が実施され、古墳時代前期の周溝墓群が確認されている。今回検出した遺構は、古墳時代後期の竪穴建物跡 1 軒、掘立柱建物跡 1 棟、柵列 1 列、その他、ビット多数である。</p> <p>竪穴建物跡は調査区南東端において検出した。約 2 分の 1 が調査区の外にあるため全体の規模は不明であるが、1 辺が約 6m の方形建物であり、北西壁にカマドの痕跡を残す。カマドは破壊されており、周辺に白色粘土・焼土が散在し、土師器や須恵器の破片が投棄されていた。時期は古墳時代後期であると考えられる。</p> <p>出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器で、コンテナケース 3 箱分である。</p> <p>以上の調査結果から本調査地点において古墳時代後期の居住域が形成されていたことを確認することができた。一方、東西の隣接地で確認されている墳墓に関連する遺構は確認することができなかった。</p>							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1494 集

有田・小田部61

- 有田遺跡群第 272 次調査報告 -

2024 (令和 6) 年 3 月 22 日

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神 1 - 8 - 1

印刷 ローターリー印刷株式会社

〒810-0075 福岡市中央区港 2 - 8 - 9